

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：12613

研究種目：国際共同研究加速基金（帰国発展研究）

研究期間：2021～2023

課題番号：19K24683

研究課題名（和文）無常観と感情様式

研究課題名（英文）Transience and Emotional Style

研究代表者

宮本 百合（MIYAMOTO, Yuri）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：60794641

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 15,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「はかなさ」と美的感情の関係を、調査や実験によって検証した。調査においては、移ろいやすい風景の画像を見た際にはかないと感じる人は、感動などの美的感情を感じやすく、さらにその関係は悲しみの感情が媒介していることが示された。「はかなさ」を実験的に操作した多国間比較実験では、特に東アジアにおいて、「はかなさ」が喚起されると、「悲しみ」の感情や美的感情が強まる効果が見られた。また、主観的な自己報告だけでなく、「はかなさ」を感じた際の生理的反応や、睡眠指標との関係も明らかにした。これらの研究から、「はかなさ」が「悲しみ」と美的感情に及ぼす影響の、多層的な基盤が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの心理学の研究においては、不安や悲しみといった「否定的な感情」は精神的・身体的健康に悪影響を及ぼすとされ、人はそのような「否定的な感情」を最小化しようとすると言われてきた。一方で、「無常観」が歴史的に根付いてきた日本においては、一見否定的である「はかなさ」や「悲しみ」の中に、肯定的な意味を見出す感情様式があると論じられてきたものの、実証研究は乏しかった。本研究は、「はかなさ」や「悲しみ」に美的感情を感じる感情様式があることとその文化的、心理的、生理的基盤、また、そのような感情様式と健康との関連を実証的に解明した点で、学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this project, we examined the relationship between transience and aesthetic emotions. Those who perceived transience when viewing images of potentially fleeting scenes were more likely to experience aesthetic emotions such as being moved, and feelings of sadness mediated such an association. Furthermore, in a multi-nation experimental study in which transience was experimentally manipulated, we found that, especially in East Asia, feelings of sadness and aesthetic emotions increased when transience was evoked. In addition to subjective self-reports, we also showed the physiological correlates of perceiving transience and the association between the tendency to perceive transience and sleep quality. These findings illuminated multilevel bases of the effects of transience on sadness and aesthetic emotions.

研究分野：社会心理学

キーワード：文化 感情 無常観 はかなさ 美的感情

1. 研究開始当初の背景

既存の心理学研究においては、人は喜びや誇りといった「肯定的な感情」を良いものとして最大化しようとし、不安や悲しみといった「否定的な感情」を悪いものとして最小化しようとし、そうした感情が精神的・身体的健康にも結び付いているとされてきた。しかし、そのような研究の枠組み自体が、欧米の歴史的・文化的背景に根ざしており、陰陽的な文化的信念のある東洋では、結果が異なる可能性がある。とりわけ「無常観」が存在する日本においては、心理学において否定的とされてきた「はかなさ」や「もの悲しさ」の中に肯定的な意味や美しさを見出す感情様式が存在し、そうした感情様式が健康にも結びついている可能性が考えられる。

例えば、歴史的に仏教や道教、儒教の影響を受けて陰陽的な文化的信念が存在する東洋文化 (Peng & Nisbett, 1999)、中でも「この世はうつろいやすく、はかない」といった無常観や、そのようなはかない存在への共感である「もののあわれ」という感覚が歴史的に根づく日本 (唐木, 1965) においては、心理学において否定的とされている「はかなさ」や「もの悲しさ」の中に、肯定的な意味や美しさを見出すことで、肯定的感情と否定的感情が共存した状態がむしろ積極的に受け入れられていると考えられる。さらには、そうした感情様式が、精神的・身体的健康にも良い影響を与えている可能性がある。しかし、これまでの心理学研究においては、こうした感情様式が十分に理論化されてこなかった。

2. 研究の目的

上記の背景に基づき、本研究の目的は、無常観的な信念が存在する文化では、「はかなさ」や「もの悲しさ」に美的感情を感じる感情様式が存在するかどうか、そうした無常観に基づく感情様式は、精神的・身体的な健康にどう影響しているのか、さらに、無常観に基づいた感情様式は、どのような歴史的・生態学的基盤によるものなのかを検証することにあった。本研究では、主観的及び生理的な指標を用いた実験・調査、及び、多国間の国際比較調査を行うことで、これらの点を検討した。

3. 研究の方法

研究1: 「はかなさ」と美的感情の関係

物事ははかないものと感じるほど、悲しみを感ず、さらにその悲しみが、感動などの美的感情を感じることにつながるかを検証するために調査を行った。日本と米国の大学生がオンライン調査に参加した。回答者はまず、「夕暮れ」や「線香花火」といった移ろいやすい風景の画像を10秒間見て、それぞれの風景に対する感想を自由に記述した。その後、各風景に対して、「感動した」「感慨深く感じた」などの美的感情 (Schindler et al., 2017) を感じる度合い、「悲しみ」などの感情を感じる度合い、また、その風景を見ることで「物事ははかないものと感じた」程度などを評定した。

研究2: 「はかなさ」が美的感情に与える影響

「はかなさ」を実験的に操作することによって、はかなさの知覚と美的感情との間の因果関係を検証する実験を行った。日本のクラウドソーシングサイトを用いてオンライン調査を行った。回答者はまず、「夕暮れ」などの風景の画像を10秒間見て、その風景に対する感想を自由に記述し、その後、研究1と同じ尺度に評定した。その後、回答者は同じ風景を提示され、その風景がどのような面ではかないかを思い浮かべるよう教示された。その後、その風景に対する感想を自由に記述し、同じ尺度に評定した。

研究3: 「はかなさ」の生理的指標への影響

「はかなさ」を感じた時の反応を、自己報告による主観的な評定だけでなく、生理指標によって測定するために日本人大学生を対象に生理実験を実施した。生理指標として皮膚電気活動を測定した。参加者は、様々な風景の画像をそれぞれ30秒間提示され、それぞれの風景に対して、条件に応じた感情を感じながら風景を見るように教示された。はかなさ条件では、線香花火などの移ろいやすい風景の画像を提示してはかなさを、畏敬条件では、銀河などの画像を提示して畏怖・畏敬の念を、楽しさ条件ではビーチなどの画像を提示して楽しい気持ちを感じるよう教示した。

研究4: 「はかなさ」と健康との関係

「はかなさ」を感じることと、身体的・精神的健康との関わりを検証するため、日本人大学生を対象に、5日間のフィールド調査を行った。参加者にはまず、ベースライン調査において、物事をはかないと感じがちである程度などを評定した。その後、連続する5日間の間の毎晩、オンライン上で短い質問紙でその日の感情や精神健康、はかなさを感じた経験についてに答えてもらい、また活動量計を装着して睡眠してもらった。

研究5: 多国間比較調査

「はかなさ」が美的感情に与える影響の歴史的・生態学的基盤を検証するために、「はかなさ」を実験的に操作する多国間比較実験を12か国 (日本、中国、韓国、フィリピン、インド、ナイジェリア、コロンビア、メキシコ、ドイツ、イギリス、オーストラリア、アメリカ) で実施した。

回答者は、はかなさ条件か、統制条件かのどちらかの条件に無作為に割り当てられた。はかなさ条件の回答者は、「線香花火」などの移ろいやすい風景の画像を提示され、「消える」「一瞬」といった、はかなさを暗示する言葉を用いて、その風景を言い表すように教示された。一方、統制条件の回答者は、同じ風景の画像を提示され、「飛び散る」「たくさん」といった言葉を用いて、その風景を言い表すように教示された。その後、その風景を10秒間見た後、研究1と同じ尺度に評定した。

研究6：文化的産物の分析

文化的産物の中で「はかなさ」と共起する単語や歴史的変遷を検証するため、歌詞を用いて言語分析を行った。1970年から2019年間の50年間に、日本の歌のランキングにおいて、年間100位に入った曲の歌詞（合計約3700曲）を対象に、「はかなさ」の言葉の共起分析を行った。また、はかなさと関連の深い、「悲しみ」の感情について、Linguistic Inquiry and Word Count (Igarashi et al., 2022; Pennebaker et al., 2015)を使用して時代変遷を検証した。

4. 研究成果

研究1：「はかなさ」と美的感情の関係

日米を通じて、移ろいやすい風景の画像を見た際に、物事ははかないものと感じる人ほど、感動などの美的感情を感じる傾向が見られ、さらにその関係は、悲しみの感情が部分的に媒介していた。つまり、日米共に、はかなさを感じがちな人ほど、悲しみを感じ、その悲しみが美的感情につながっている可能性が考えられる。

研究2：「はかなさ」が美的感情に与える影響

風景写真を見る際に、はかなさを思い浮かべることを教示された条件では、そのような教示のなかった統制条件に比べ、より物事ははかないものと感じていたため、実験操作が効果的であったことが確認された。さらに、はかなさが顕著にされた条件では統制条件よりも、悲しみも、美的感情もより強く感じたと評定されていた。つまり、はかなさを知覚することは、悲しみと美的感情を強める効果があると考えられる。

研究3：「はかなさ」の生理的指標への影響

各画像提示後1秒から30秒の間に、SCRが0.05 μ S上昇した点をSCR潜時とし、その時点からの最大変化量をSCR振幅値とした。まず、0.05 μ S以上のSCRが観測された画像の数を従属変数とした分析を行ったところ、はかなさ条件が楽しさ条件に比べて多く、畏怖条件はどちらも差がなかった。次に、SCR振幅値を従属変数とした分析を行ったところ、はかなさ条件と畏怖条件全体に比べて、楽しさ条件はSCR振幅が小さかった。はかなさと畏怖の念を感じることは共に、楽しさを感じることに比べて、覚醒水準を高めることが示唆される。

研究4：「はかなさ」と健康との関係

ベースライン調査において、物事ははかないと知覚しがちであると報告していた人ほど、その後の5日間の間、睡眠効率がよく、中途覚醒時間が短いという連関が見られた。これらの関係は、5日間の間に感じられていた快・不快の感情を統制しても見られていた。また、5日間の日常生活の中ではかなさを感じていた人は、快・不快の感情を統制した上でも、精神健康が良いという傾向が見られた。

研究5：多国間比較調査

まず、6か国（日本、中国、韓国、ナイジェリア、コロンビア、イギリス）において、はかなさ条件の回答者は統制条件の回答者に比べ、より物事ははかないものだと感じていた。さらに、5か国（日本、中国、韓国、ドイツ、イギリス）において、はかなさ条件の回答者は統制条件の回答者に比べ、より悲しみを感じていた。さらに、日本と中国の2か国では、はかなさ条件の回答者は統制条件の回答者に比べて、美的感情を感じており、イギリスとコロンビアでも、（弱いながら）同様の傾向が見られた。これらの結果から、「はかなさ」が美的感情に与える影響は、東アジアで特に強く見られる一方で、他の文化圏でも見られる可能性が示唆された。

研究6：文化的産物の分析

「はかなさ」は「花」「消える」「散る」などと共に「美しい」という単語と共起していた。ここから、日本の文化的産物において「はかなさ」の概念は美的知覚の概念と結びついて存在していることが示唆された。また、「悲しみ」の感情に関連した語彙は、他の否定的な感情（「怒り」や「不安」）に関連した語彙に比べて、時代を通じてより多く見られている一方で、「悲しみ」の感情に関連した語彙は、過去50年の間に徐々に減ってきていることがわかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 12件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Choi Jeong Ha (Steph)、Miyamoto Yuri	4. 巻 49(8)
2. 論文標題 Cultural Differences in Rumination and Psychological Correlates: The Role of Attribution	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Personality and Social Psychology Bulletin	6. 最初と最後の頁 1213 ~ 1230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/01461672221089061	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Yoo Jiah、Martin Jared、Niedenthal Paula、Miyamoto Yuri	4. 巻 22(8)
2. 論文標題 Valuation of emotion underlies cultural variation in cardiovascular stress responses.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Emotion	6. 最初と最後の頁 1801 ~ 1814
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/emo0000964	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Maeng Ahreum、Lee Hyung-Seok、Miyamoto Yuri	4. 巻 10
2. 論文標題 Culture and trait inferences from facial cues	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Culture and Brain	6. 最初と最後の頁 24 ~ 37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s40167-022-00114-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Choi Jeong Ha (Steph)、O' Donnell Calvin D.、Phan Vivian N.、Coe Christopher L.、Miyamoto Yuri	4. 巻 177
2. 論文標題 Role of the valuation of nervousness in cortisol responses to psychosocial stress task and task performance in European American and East Asian students	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Biological Psychology	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.biopsycho.2023.108495	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Park Jiyoung, Kitayama Shinobu, Miyamoto Yuri	4. 巻 --
2. 論文標題 When High Subjective Social Status Becomes a Burden: A Japan?U.S. Comparison of Biological Health Markers	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Personality and Social Psychology Bulletin	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/01461672231162747	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yuri Miyamoto & Carol D. Ryff	4. 巻 64(2)
2. 論文標題 Culture and Health: Recent Developments and Future Direction	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 90-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12378	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Jeong Ha Choi & Yuri Miyamoto	4. 巻 64(2)
2. 論文標題 Cultural Differences in Self-Rated Health: The Role of Influence and Adjustment	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 156-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12405	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yoo Jiah, Martin Jared, Niedenthal Paula, Miyamoto Yuri	4. 巻 22(8)
2. 論文標題 Valuation of emotion underlies cultural variation in cardiovascular stress responses.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Emotion	6. 最初と最後の頁 1801 ~ 1814
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/emo0000964	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Choi Jeong Ha (Steph)、Miyamoto Yuri	4. 巻 49(8)
2. 論文標題 Cultural Differences in Rumination and Psychological Correlates: The Role of Attribution	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Personality and Social Psychology Bulletin	6. 最初と最後の頁 1213 ~ 1230
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/01461672221089061	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Gobel Matthias S.、Miyamoto Yuri	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 Self- and Other-Orientation in High Rank: A Cultural Psychological Approach to Social Hierarchy	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Personality and Social Psychology Review	6. 最初と最後の頁 54 ~ 80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/10888683231172252	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Tamir Maya, Ito Atsuki, Miyamoto Yuri, Chentsova-Dutton Yulia, Choi Jeong Ha, Cieciuch Jan, Riediger Michaela, Raders Antje, Padun Maria, Kim Min Young, Solak Nevin, Qiu Jiang, Wang Xiaoqin, Alvarez-Risco Aldo, Hanoch Yaniv, Uchida Yukiko, Torres Claudio, Nascimento Thiago Gomes, Afshar Jahanshahi Asghar, Singh Rakesh	4. 巻 --
2. 論文標題 Emotion regulation strategies and psychological health across cultures.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 American Psychologist	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/amp0001237	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Choi Jeong Ha (Steph)、Miyamoto Yuri	4. 巻 18(1)
2. 論文標題 Revisiting negative experiences: A sociocultural cognitive framework	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Social and Personality Psychology Compass	6. 最初と最後の頁 --
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/spc3.12811	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 Miyamoto Yuri
2. 発表標題 Culture and Systems of Emotions: Are Negative Emotions Always Harmful?
3. 学会等名 Hebrew University of Jerusalem (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miyamoto Yuri
2. 発表標題 Culture and Systems of Emotions: Are Negative Emotions Inherently Harmful?
3. 学会等名 Ohio State University (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Miyamoto Yuri
2. 発表標題 Preference for and Beliefs about Worry Across Cultures: Is Worrying Always Bad for Mental Health?
3. 学会等名 Society for Affective Science, Emotion Regulation Preconference (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yuri Miyamoto
2. 発表標題 Benefits of Valuating Negative Emotions Across Cultures
3. 学会等名 Society for Affective Science (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomotaka Okuyama, Atsuki Ito, Yuri Miyamoto
2. 発表標題 Aesthetics of transience: Do fleeting things evoke aesthetic emotions?
3. 学会等名 Advances in Cultural Psychology Preconference, Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Tomotaka Okuyama, Yuri Miyamoto
2. 発表標題 Measuring "small happiness": Scale development and its validity
3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yuri Miyamoto
2. 発表標題 Culture and emotitonal styles
3. 学会等名 International Society for Research on Emotion (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yuri Miyamoto
2. 発表標題 Social hierarchy, well-being, and health: The dual nature of high social ranks
3. 学会等名 Association for Psychological Science (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yuri Miyamoto, Tomotaka Okuyama, Atsuki Ito, Brian O'Shea, Michiko Ueda
2. 発表標題 Is mobility linked to higher or lower loneliness? The importance of freedom and stability
3. 学会等名 Association for Psychological Science (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Tomotaka Okuyama, Atsuki Ito, Michiko Ueda, Yuri Miyamoto
2. 発表標題 Both community stability and relational mobility are linked to low loneliness
3. 学会等名 Conference of the Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 増井拓紀、宮本百合
2. 発表標題 日米歌詞におけるMixed emotionの文化比較研究
3. 学会等名 グループダイナミクス学会第69回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 奥山智天、宮本百合
2. 発表標題 「小さな幸せ」の状況サンプリング 日常の中で感じる強度の弱い幸福の探索的検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Miyamoto, Y., & Coe, C. L.	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Guilford Press	5. 総ページ数 8
3. 書名 Culture, emotion regulation, and physical health. In J. J. Gross & B. Q. Ford (Eds.), Handbook of emotion regulation (3rd ed., pp. 481-488)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

一橋大学社会学研究科文化心理学研究室 https://www.miyamotoyuri.com/ja

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	University of Wisconsin-Madison	Georgia State University		